

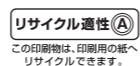


にいがた
地域映像
アーカイブ

No.7



新潟大学 Niigata University



ISSN-1883-5643

『村の肖像』展IVにいたるまでの経緯と今後

原田健一（新潟大学）

私が金山町に行くことになったのは、2008年4月に新潟大学人文学部に赴任し、新潟の各地域にあるさまざまな写真や動画を発掘・デジタル化し、見ることができるようにする地域映像アーカイブ・プロジェクトを始めたことによる。同僚であった船城俊太郎先生が定年退官するにあたって、金山町上中井にある実家にも古い写真があるから見に来ますかと声をかけてくれた。それを見に行ったのは、2012年11月13日であった。その日は、船城先生の家で何枚かの湿板写真を拝見した後、自分の親戚で写真を撮り続けている人がいるからといって角田勝之助さんを紹介されたのだった。私は、角田さんの写真を見て、1つの村で60年にわたって撮り続けられたものとして貴重な記録であるだけでなく、写真として非常に優れたものであることにすぐに感じた。次に金山町に行った2013年9月6日の時には、新潟大学地域映像アーカイブ研究センターで11月から12月にかけて「2013にいがた地域映像アーカイブ・クインテット」と題して新潟市内の新潟日報メディアシップなど5箇所で行った上映展示イベントの一環として、私は旭町学術資料展示館で「村の肖像展」として角田さんの写真展示をすることにしたいと考えていた。そこで2013年4月より助教として赴任した写真家でもある榎本千賀子さんに声をかけ一緒に角田宅にうかがうことにした。榎本さんは角田写真を見てその素晴らしさに気づき、キュレーションを引き受けてくれることになった。榎本さんと金山町との長いつきあいの始まりであった。また、砂丘館の大倉宏館長は12月に旭町学術資料展示館での「村の肖像展」を見て、是非とも砂丘館でもやりたいと声をかけてくれた。そこで、2014年9月に「村の肖像I・展」を砂丘館で、「村の肖像II・展」を旭町学術資料展示館で開催した。また、翌2015年には、榎本さんと相談し大日方欣一さんにキュレーションをしてもらい、8月に「村の肖像展I・II・III」を金山町自然教育村会館で、10月に「村の肖像展I・II」を砂丘館で、「村の肖像展III」を旭町学術資料展示館で行った。

2015年10月に展覧会が終わったあと、大倉館長からは「村の肖像展」はこれで一区切りにはしたいという話があった。私は角田さんの写真がこれから1970年代以降のカラー写真になることや、2016年3月に榎本さんが助教を退官後、金山町に住んでフィールドワークをすることになっていたのも、カラー写真による角田・榎本二人展を「村の肖像展IV」としてやってみてみてはどうかと話をした。大倉館長は、それなら2017年に榎本さんの写真も出そろった頃にやりましようとなった。2015年12月頃の話である。

ところで、榎本さんは2016年5月より金山町大志に住み、自分の写真を撮ることや角田さんの写真の調査をするだけでなく、10月から「村の肖像」プロジェクトとして金山町の各村々の映像資料調査を始めた。これは、全国でも初めてといてもいいような村の個々の集落にある写真資料の調査で、この調査でいろいろな新しい発見がもたらされた。その内容は、2017年2月に刊行される『地域と映像アーカイブ—記憶とデジタル化をめぐる実践と研究(仮題)』(学文社)の榎本さんの論文「『村の肖像』制作の現場から：福島県大沼郡金山町における映像アーカイブ構築」に詳しい。この調査が非常に重要なのは、それまで民俗学や村落社会学で集落の文化の多様性が言われてきたことを、映像を通して、実証したことである。村の人びとにとっては、自分たちの写真は日々の生活の営みのなかで生み出されたものにすぎず、それほど大きな社会的な意味をもつものとは理解していないかもしれない。しかし、その何気ない映像は人びとの日常生活の奥深くまで普及し、私たちの心の底にまで到達し、その世界の微妙な贅を写し出していたのだった。それは、本当は驚くべきことなのだ。榎本さんは村の中を走り回り、こうした映像を見つけ出すことによって、人びとに大切な記憶を思い起こさせたとと思う。村の人びとは、あらためて自分たちのやってきたことや日々の思いを振り返り、自分たちを支えてきた父や母、祖父や祖母、あるいは助けてくれた仲間たちのことを懐かしく思い、その時間の大切さを感じたり、あるいは、今後の村のあり方、未来に何を残すべきかを考えるきっかけとなるなど、いろいろなことを考える貴重な時間になったのではないかと思う。

今回の展示、並びにこの小冊子は、ストレンジャーとして外の視線で金山町の現在を優しく見つめた榎本さんのカラーの金山町から始まり、1990年代から1970年代へと玉梨を舞台に村に住む角田さんが生活に根ざした視線で人びとを写したものを通し、さらに、今回発掘された写真から、過去へ1930年代まで、集落ごとの多様な生活、文化、社会のありようをゆっくりとたどれるようにしたいと考えた。キュレーションは、大日方さん、あるいは原田の助言を得るだけでなく、金山町の人びとの記憶や思いを受け取りながら、榎本さんが行った。

この小冊子に記録されたものは金山町の人びとにとって大切な記憶の時間であろうが、それだけでなく、多くのこの世界に存在する村々の世界、そこでの人びとの思いを知る手がかりになるのではないかと考えている。

金山町 MAP

金山町は、福島県・新潟県の県境に位置する、人口約2,100人の町である。

- 📍 上田 Uwada.....p.16
- 📍 大志 Oship.3, 4, 6, 11, 15
- 📍 川口 Kawaguchi.....p.5,6, 11-14
- 📍 越川 Kosugawap.6
- 📍 三条 Sanjop.18
- 📍 玉梨 Tamanashi表紙・裏表紙, p.7-10, 12
- 📍 中川 Nakagawa.....p.14
- 📍 沼沢 Numazawa.....p.15
- 📍 本名 Honna.....p.6
- 📍 水沼 Mizunuma.....p.15
- 📍 横田 Yokota.....p.17
-
- 📍 南会津町・会津田島 Aizu-Tajima, Minami-Aizu Town....p.12





夏の只見川岸边 金山町・大志 2016年



冬の只見川岸边 金山町・大志 2017年

うつわの目 ―榎本千賀子の写真

大倉 宏 (砂丘館館長・美術評論家)

角田勝之助の写真に、いかに私が揺さぶられたかについては、書いたことがある。

その角田が生まれ、育ち、写真を撮り続けてきた金山に、去年(2016年)榎本千賀子が移り住み、撮影した写真と、角田の写真が並列された今回の展覧会のポスターおよびチラシを見て、まるで2つの手が会って、音を立てているようだと感じた。

幼い頃から育った東京の住宅地を歩き、撮った榎本の白黒の写真に惹かれて、新潟絵屋での個展を企画したのが3年前――榎本が新潟に転居してきた翌年で、その次の年には彼女が新潟で撮った新作の個展を開いた。そこには住宅地である青山や小針の光景と、そこから地続きの葎の茂る信濃川べりや、まばらな灌木がやぶのようになった海岸の一角が写されていた。このときから榎本の写真はカラーになったが、今回の金山の写真もカラーで、新潟大学地域映像アーカイブ研究センターによる角田の写真を年代順で紹介していく展示の4回目でもある本展に並ぶ角田の写真も、はじめてカラーになった。1950-70年代の、一般にもカラーフィルムが普及しはじめた時期の角田の写真ということになる。

角田と榎本。写真を撮る人間としては、根本的にふたりは違っている。角田の興味の対象はカメラを手にした瞬間から、あるいはそれ以前から、人だった。その写真に迎えられた人間たちから広がる村世界の広さに、私は感銘を受ける。

一方榎本の東京・新潟の写真には、身体としての人の影が



商店前に展開していたホースたち 金山町・川口 2017年

ENOMOTO Chikako 1981年東京出身。2005年「DAEDALUS」MUSEE F(東京)より写真家として活動。自らが暮らす環境を対象として、写真を通じた探索を重ねてきた。2013年より新潟大学地域映像アーカイブセンターに参加し、角田勝之助の映像資料の整理および「村の肖像」展シリーズの構成に携わる。2016年5月末、金山町に移住し、町内で自らの制作と町内に残る写真資料の整理を行う。2013-2016年新潟大学助教。現在、新潟大学研究員および金山町臨時職員。



左上から ダム浚渫作業場入り口のポール 金山町・越川 2016年 / サイノカミの準備にいそむむひとびと 金山町・大志 2017年 / 畑のパイプにかかっていたビニールシート 金山町・大志 2017年 / 大志の家々をめぐる柳津から来た神楽の一行 金山町・大志 2016年 / 春の雪で作ったトンネルを見せてくれた少年 金山町・川口 2017年 / 只見川に落ちていた残雪 金山町・大志 2017年 / 雷神様の祭りに集まったひとびと 金山町・大志 2016年 / 冬の只見川に注ぐ湯倉温泉 金山町・本名 2017年

一切ない。人の像が枠内に入り込むことで、乱さずにいないものを、そのままに定着しようとする揺るがぬ決意のようなものを見る毎に感じてきた。

その榎本が金山で撮影した写真群に、初めて人が登場する。そして、人を通じて村を見つめてきた角田の写真と接触する。

榎本千賀子は2013年から3年間新潟大学に在籍し、地域映像アーカイブ研究センターによる角田の写真の整理、紹介作業に中心的な役割を果たしてきた。現在は金山町の臨時職員として、村に残された写真や映像記録の調査、整理の仕事に関わっている。角田と金山への関心の程度は、生業としての仕事の範疇を明らかにはみだしている。

角田の写真世界が、写された人間から広がる、共同体とその向こうに広がる世界の奥行きを生成するのに対して、その角田と53歳の年齢差のある榎本の写真は、環境の側の視点から、その環境／場所に形作られている「私」を見つめる写真だ。自分も一時期暮らした日本の新興住宅地に、観念的嫌悪を育ててしまった私が、榎本の住宅地写真に接し、動かされたのは、「ここが私だ」と言う、やわらかく、毅然とした不思議なく場所の声の力によってだった。私とその一部でありたくない願う場所が、寡黙に私を見つめ、「ここはあなただ」と言う。場所は人間世界を容れるうつわだが、そのうつわと「私」の決定的な切断を、角田と榎本のちょうど中間世代である私は身に刻んでき

たのに、榎本の写真の前に立つ一瞬だけ、その亀裂が失われる――長年のこわばりから放たれる心地を覚えて、動揺したのだった。

角田の写真は、私が1970年代の首都圏郊外に移住する前、小学校時代の幾年かを過ごし、閉山とダム建設によって姿を消した新潟県の鮎山集落で過ごした時空の感触をよみがえらせる。

その集落とは異なり、今も継続する世界としてあり続ける金山に、榎本が暮らしながら撮った近作は、そこにいる人々の姿を含め、「うつわの目」が榎本という鏡に「環境という私」を映した像であり、角田勝之助の写真という右手を拍つ、美しい左手の形をしている。■



TK-P-011-042-08 「きのこ山」と呼ばれる野外での宴会 金山町・玉梨 大妻林道 1970年10月



TK-P-015-018-02 盆踊り 金山町・玉梨 1978年9月

唄ごえの生まれる場所 —次なる角田勝之助写真展へ向けて

大日方欣一（写真／映像研究、九州産業大学芸術学部教員）

あくまでも空想しているだけの段階、とはいえいつか実現すれば面白いのではないかと考えている展覧会のプランをいくつか持っていて、その一つが「唄ごえの生まれる場所—ベン・シャーンと角田勝之助を中心に」という写真展企画である。

画家として著名なベン・シャーンがとくに1930年代不況下のアメリカで写真家としても活動したことはよく知られている。ニューディール政策の一環でおこなわれたFSA（農業保全局）の写真プロジェクトに参加して彼がスナップした、南部の綿作地帯などの労働者や庶民の姿をつたえる写真群は、同じプロジェクトで活躍したドロシア・ラング、ウォーカー・エヴァンズらの写真と比較して、いい意味で緩いというか、人のポーズの取り方に端正さを求めず、くだけていたりポーっとしていたりするものがとても多い。茫然とくつろいでいるのだ、ベン・シャーンのカメラアイが捉える人びとは。私はかねがね、角田さんの写真に惹かれるのは、くつろぐ身体がそこにあるからではないかと思ってきた（プロ意識の過剰な写真家には撮れない身体のありようがゆたかに息づいている！）が、相通じる写真はなんだろう、と見回して真っ先に写真家ならざる写真家ベン・シャーンのそれが想起されてくるのだ。

絵面のまとめ方が似ているという意味のことを言いたいのではないし、フレーミングが似ているということでは、1950年代の6×6判による角田スナップは、西アフリカ、マリ共和国の都市バマコでずっと活動していた写真家



TK-P-016-056-03 刈払作業 金山町・玉梨 高森山登山道 撮影時期不明

TSUNODA Katsunosuke 1928年金山町玉梨生まれ。戦前より写真に関心を抱き、1951年より現在まで、自らの生まれ育った玉梨地区を中心とする金山町の「村」とそこに暮らすひとびとの姿を、写真や動画に収め続けてきた。1964年からは、写真の腕を見込まれ、地元建設会社に写真係として勤務した。新潟大学地域映像アーカイブセンターでは、2013年より角田映像の調査・デジタル化に着手し、その成果を「村の肖像」展シリーズとして公開してきた。

マリック・シディベの作品ととても近しかったりするのだが、私にはどうもベン・シャーンと角田勝之助の、おのずと他人をくつろがせるような力がともにとびぬけているように思えてならない。

くつろぐ身体から、ふと、唄ごえが生まれてくる—そうした場面を、二人の写真にたびたび見ることができるだろう。ベン・シャーンの場合には、道ばた（ロード・サイド）。よるべなく道ばたで立ち尽くし、あるいは語らっている人びとのあいだから唄らしきものが立ち上ってくるシーンをよく撮っている。一方、角田さんの写真では、人びとがどう宴の場から、唄が始まっていく。写真は沈黙の、無音のメディアといわなければならないのだろうが、両者のスナップショットには、唄ごえがどこから湧きだすのか、どこからやって来るのかが、写し捉えられているのではないだろうか。

「唄ごえの生まれる場所」展では、二人の写真それぞれをしっかり見せた後、それに連なる古今東西の様々な「唄の誕生」に触れる写真をとり揃えたい。たとえば、ウジェーヌ・アジェが1900年前後のパリの路地で撮った、手回しオルガン弾きの老人と唄う少女の写真はどうしたって欠かすことのできない一枚であるはず



左上から TK-P-014-066-04 こどもたちの集まり 金山町・玉梨 撮影時期不明／TK-P-013-038-01 冬の玄関 金山町・玉梨 1974年3月／TK-P-013-042-01 熊の解体 金山町・玉梨 1974年5月／TK-P-013-021-04 富三郎宅にてきのこ山 金山町・玉梨 1973年11月

だ。ニューヨークに暮らすアフリカ系の人びとの暮らしを描くロイ・デカラヴァの写真集「The Sweet Flypaper of Life」もぜひ交えてみたい。また、角田さんが追いかけた金山のアマチュアバンド「すみれ楽団」の写真をあつめた展示室の続きに、浅井慎平、草森紳一、鶴本正三による伝

説の「ビートルズ・レポート」を再構成した部屋をつくることも検討に値するのではないだろうか。こうして書いてみると、構想が次々に湧き起こってくるが、それも角田勝之助とベン・シャーンの写真の大いなる魅力に動かされてのことなのである。 ■

村の男の仕事と女の仕事

編集：原田健一
テキスト：榎本千賀子

男の仕事

金山町は総面積の90%が森林で、冬の豪雪がもたらす莫大な水資源と、山菜や茸、国内最高級と言われる会津桐、本名杉・三条杉などと呼ばれる杉の良材、漆などの多彩な森林資源に恵まれた町である。町内の各村々はこれらの資源を、伝統的な手仕事と折々の新技術を組み合わせながら、自らの暮らしへと活用してきた。また、大正期に只見川での筏流しで杉材の出荷が始まった新潟や、桐下駄の一大消費地であった東京をはじめ、国内外の広い地域との経済交流が行われていった。



乾燥中の桐下駄材と水井桐材店の職人たち 金山町・大志 1935年頃



川口・越尾商店増築時の移動製材現場 動力には外車のエンジンを流用した 金山町・場所不明 1936年 / 川口を起点に新潟への物流に従事した山内運輸部の車 金山町・川口 昭和10年代 / 国策縮羊の導入 金山町・川口 1937年



親戚一同でのホップ摘花 作業量に応じて各自に賃金が支払われた 金山町・川口 1960～1965年頃 / 手作業による田植え 金山町・川口 昭和30年代 / 橋脚コンクリート用の砂利採取 金山町・玉梨 1933年頃



金山町の男女が多く農業技術を身につけた会津山村道場での「ホームスパン講習会」 南会津町・会津田島 1942年

女の仕事

山間部の暮らしには、治水をはじめとする様々な土木事業や、狭小な傾斜地での耕作など、厳しい肉体労働と技術、そして知恵が必要とされる。金山町に残る写真からは、この町の男女が、複雑な分業のもとに様々な試行錯誤を行い、ともに暮らしを切り開いてきた姿が見えてくる。男たちが山林の資源を獲得し、その加工や運搬に奮闘するあいだ、女たちもまた、自らの肉体を酷使して橋脚の建設や道路、溜池作りなどの村内のインフラ整備にあたり、農作業に精を出し、遠方に出向いて産物をよりよく活かすための技術を学ぶなど、力を尽くしていた。

大人の遊びと子供の遊び

大人たちの遊び

農村歌舞伎が活発に行われていた旧南山御蔵入領の伝統を引き継ぐ金山町には、今も芸能が生活のなかに生きている。ここでは神楽などの芸人たちが家々を訪ね歩く光景は珍しいものではなく、山入地区では「山入歌舞伎」が毎年住民の手で上演されている。年に一度の各地区の「文化祭」では、三番叟から演歌までの様々な出し物を住人同士が披露し合う。住民が自ら作り出し、村の活気を呼び覚ますこうした大切な「遊び」を昭和期に担ったのは、地元青年団の若者たちであった。



農村歌舞伎の伝統を引き継ぐ、細木で組み立てられた仮設舞台の上の青年団員 金山町・川口 1949年



川口青年団の集会「聞け万国の労働者よ」の合唱 金山町・川口小学校講堂 1948年 / 青年団主催の敬老会 金山町・川口尋常小学校講堂 1940年 / 盆踊りのやぐら 金山町・川口熊野神社境内 戦後・詳細不明



木登りする少年たち 金山町・中川小学校 1956年頃

子供たちの遊び

学校は、こどもたちの学びの場としてだけでなく、世代を越えた文化活動の場としての役割を担ってきた。左頁で紹介した青年団活動の場となってきたのも、その多くは小学校である。こどもたちは身近に目にする青年団の若者たちに憧れ、家庭を持つ前の若者たちは、自分たちを慕うこどもたちに鼓舞されていた。青年団が小学校を会場に開催する敬老会では、しばしばこどもたち自身が出演者として、観客として遊びを楽しみつつ、年長者たちへのもてなしの場を盛り上げた。若者、壮年、老年……こどもたちは遊びまわるうちに、世代を繋ぐ鍵となってきたのだった。

中川小学校学芸会(推定) 中川小学校は、1981年に金山小学校に統合された 金山町・中川 昭和20年代後半 / 手製のソリで遊ぶこどもたち 金山町・川口 1967年 / 雪の芸術祭 金山町・川口中学校 1963年





初代水沼橋流出後に活躍した「岡田式渡船」 馬車を2、3台は積むことができる大型の渡し船であった 金山町・水沼 1913～1925年頃

かねやま「村の肖像」プロジェクトより

水辺の記憶とダムの記録

水辺の記憶

金山町は、只見川とその支流が巡り、カルデラ湖の沼沢湖を頂く水辺の町である。水のありかたは、町の暮らしをかたちづくるひとつの基礎であった。川は、村と村を隔つつ繋ぐ交通路であり、鮭が遡上し、川魚が多く暮らす資源の宝庫であった。寛文年間より鯉や鮒の放流が続けられてきた沼沢湖では、大正期には大規模な淡水魚の養殖が始まり、昭和初期には冷たく澄んだ水を好むヒメマスがこの地の特産となった。こうした水辺の姿は、只見川流域の電源ダム開発によって、戦後大きく変わってゆく。



ダムに沈んだ下井草集落での日中戦争戦没者の村葬 金山町・大志 1938年 / 荷物運搬に使役された舟場の馬 金山町・水沼 1943年以前 [推定] / 沼沢湖のヒメマス地引網漁 金山町・沼沢 1932年



上田発電所 嶽の山中腹より工事場を望む 金山町・上田 1953年 / 上田発電所工事現場 金山町・上田 1952年～1954年 / 上田発電所工事現場 金山町・上田 1952年～1954年

ダムの記録

東北電力上田発電所

豪雪がもたらす豊富な水量と急激な高低差を有する只見川は、明治期より水力発電の好適地として注目されてきた。そして戦後、金山町内には相次いで電源ダムが建設されることとなる。ダム建設は町に様々な仕事や只見線をはじめとした新たなインフラをもたらし、高度成長期の都市部で必要とされた多くの電力を供給した一方で、ひとびとが日々険しい土地に切り開いてきた農地や宅地を奪い、生活を否応無しに変えていった。さらには、只見川の清流を押しとどめ、治水上の新たな課題を生み出した。写真は1952年9月着工、1954年3月より発電を開始した最大出力63,900キロワットの水力発電所、東北電力上田発電所の工事風景。

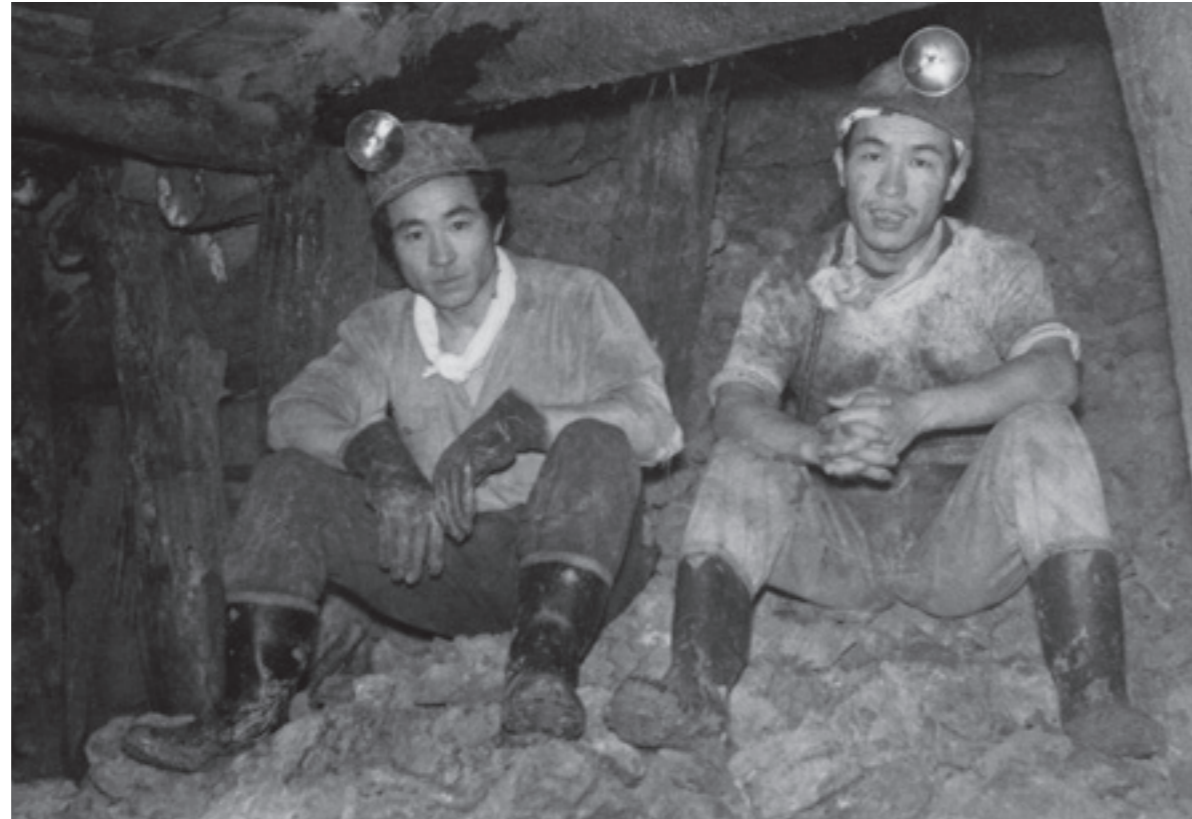


只見川上田発電所での仮排水路閉塞完了と湛水開始 この後、上流の中川・宮崎集落では、水没した田畑の代わりに上野原開拓に乗り出すこととなった 金山町・上田 1954年2月4日午前10時

鉱山の記録と廃村の記憶

鉱山の記録 横田鉱山

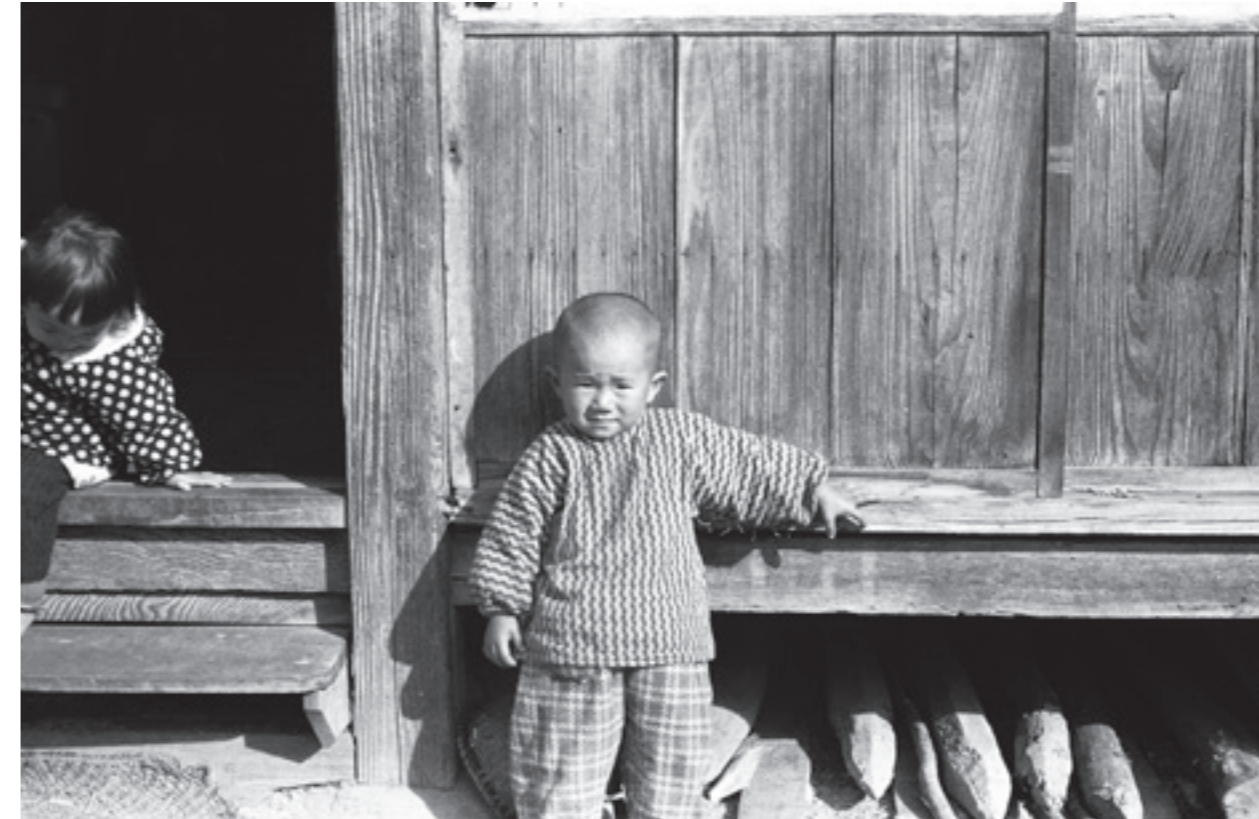
かつての金山町には、三更鉱山、田代鉱山など、いくつもの鉱山が操業していた。そのなかのひとつ、黒鉱・黄鉄を産する横田鉱山では、1937年に露天掘りが、1955年に日本曹達株式会社による地下採掘が開始された。専用住宅が建ち並び、独自の神社がおかれた横田鉱山は、最盛期には全国から集まった139名の従業員が暮らした、ひとつの新しい「村」であった。この「村」のひとつとは、日々の仕事と労働運動を通じてその結束を強めていった。また、労働者向けの商売が盛んとなり、農業青年クラブである4Hクラブの活動を拡大した地元住民と労働者との交流が試みられるなど、地元横田と鉱山「村」の結びつきも次第に深まった。しかし残念ながら、横田鉱山は銅鉱価格の下落により1972年に閉山した。



横田鉱山坑内 金山町・横田 1972年以前



横田鉱山 金山町・横田 1972年以前 / 全国の労働組合と連携して展開した横田鉱山労働運動 金山町・横田 1955～1960年頃 / 横田鉱山坑道入口 24時間体制で行われたスト破りの監視 金山町・横田 1955～1960年頃



三条の子ども 金山町・本名(三条) 1960年以降

廃村の記憶 三条

三条は、1981年に廃村となった集落である。冬季には最寄りの本名集落からも徒歩で2時間はかかる山深い地にありながら、町内でも豊かな森林資源に立脚した独自の生活を守ってきた村であった。なかでも山菜は特筆すべきもので、三条のひとつとは、秋には冬越しに必要な食料を「ゼンメエ(ゼンマイ)アテ」と呼ばれる掛売りで購入し、1世帯あたり生で2トンも収穫したという春のゼンマイで支払っていた。写真は、1960年に村で初めてカメラを購入した栗田政行によるもの。栗田は、すでに若者の離村が始まっていた村で、この地に育つ最後の世代になるかもしれない甥や姪たちを多く撮影していた。

金山町には、立地や災害などの理由により、やむなく移転・廃村となった集落が複数ある。

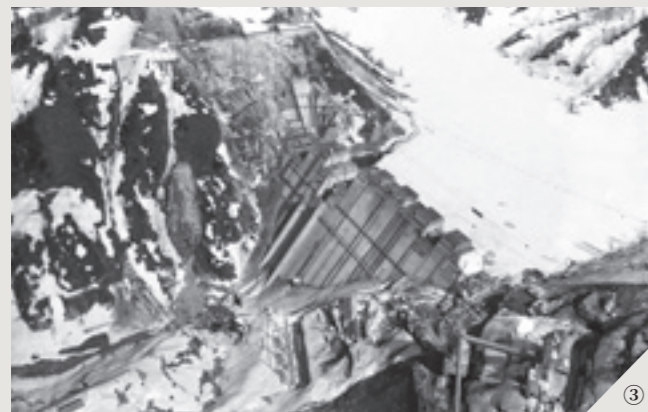
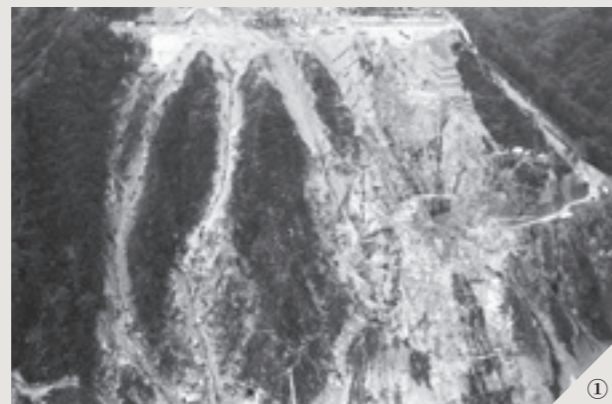
三条の子どもと女性 金山町・本名(三条) 1960年以降 / 三条の通りを行く子ども 金山町・本名(三条) 1960年以降 / 夏期に暮らした農作業のための仮小屋の前に立つ老人と少女 金山町・本名(三条) 1968年 [推定]



消滅した生活の記憶と 銀山湖の底にあるもの

斎藤友子

(アニメーション/サウンドプロデューサー)



あるご縁により、この度、約60年前に父が撮影したネガをアーカイブ化していただく事になった。30年以上前に亡くなった父は新潟日報の新聞記者だった。アーカイブ化して頂いた事で、初めて見ることができた父の写真には、当時の父の記憶が焼きついていた。父の小出支局時代の報道写真である。そもそも、父が亡くなって以降、60年前のネガを、私が大切に保管してきたのは理由があった。私が中学時代に父から聞かされた、一人の男性の話が頭から離れなかったためだ。その男性は、奥只見ダム完成時には、住んでいた山地の居住地が沈むため、保証金と引き換えにそこから出た。その保証金は、長岡で芸者と懇ろになったあげく使い果たしてしまい、再び山に戻り、ダムで沈むかつての居住地からさらに奥地に自分の住まいを求めたらしいが、結局どうなったのかその後を知る人もいず、山から落ちて亡くなったらしいとの噂が立った、という一人の元マタギの話だ。当時、ダムに全く興味のなかった私は、奥只見ダムの銀山湖底に、人が生活した場所が沈んでいる事をその時に初めて知った。そして父から聞いた男性がそのまま湖の中に沈んでいるかのような強烈な印象を持った。この時の衝撃が何を意味するのか、父の写真からようやく一つ一つ紐解くことが出来る。今回は、その中から数枚、父が書いた新聞記事の内容と合わせてご紹介したい。

ダムは巨大な建造物だ。そして、写真にもあるようにどうしても自然を一度破壊した上でないと建設は出来ない。そして奥只見ダムは、豪雪というダム工事がかつて経験した事のない大自然とも闘った。その工事の様子の写真も存在していた中の数枚。(写真①～③)山肌の右奥手がダムにより水没する地域だ。その水没した銀山平、波拝が沈む前の写真が存在していた。④から⑥は元波拝分校や銀山平の鉱山で昔おきた水難事故で亡くなった方の供養(写真では旧字)塔と墓石だ。すべて今は銀山湖の底だ。

1958年～1960年の 魚沼地域取材した、 いち新聞記者の記録 写真と新聞記事

そして、ハイカーたちの唯一のいこいの場であったであろう銀山荘は、留守番の人と4人の木こり達が《最後の住人》となったそうだ。(写真⑦)

奥只見ダムで発電される電気は、東京にも向かう。厳冬の中で、送電線の被害調査をするため越冬して試験・観測をする試験所が、雪氷試験に最適であった枝折峠にあった。着氷と電流の関係など調査されたい。調査員はいずれも東京出身で、枝折峠の冬の悪天候の中、命がけの測定を続けたそうだ。このように住み慣れた土地から移転してくれた人達や、ダム建設や調査・研究を命をかけて行った人達のおかげで東京は沢山電気を消費する事が可能になったのだ。(写真⑧)

そして、建設中の奥只見ダムより北にある広神村手ノ又(現在は在住者なし)では、この写真⑨が撮影された昭和35年、豪雪で本校に行けないため、雪が消える5月まで、村にいる農業本職の代用教員が子供達の先生だった。先生は週一回、子供たちのために山を超え、分校に連絡に行っていたという。父ちゃん先生、手作りの山の神「十二さま」お祭りの弓が生きた教材、春になるのが待ち遠しい子供達。全戸数3戸の中の、父ちゃん先生の家の屋根裏に黒板と机ふたつの小中学校。ちなみにここに電気きたのは、昭和37年頃らしい。

入広瀬村の浅草岳の原生林から樹齢300年以上のブナを切り出す木こりたち。平石川の溪谷をトロで大白川の貯木場にスリル満点で運んだそうだ。トロの音でヘビが這い出て、熊も前を横切ったらしい。(写真⑩)現在は、ブナ林は保護され伐採は行われていないようだ。このように、今はなくなってしまった日常生活の記録写真も多い。先に書いた元マタギの男性の生きた日常感覚を思い起こし、新たな記憶として未来に繋げていく事が、父が残し、私に写真を託した意味になるのかもしれない。

そして、ハイカーたちの唯一のいこいの場であったであろう銀山荘は、留守番の人と4人の木こり達が《最後の住人》となったそうだ。(写真⑦)

奥只見ダムで発電される電気は、東京にも向かう。厳冬の中で、送電線の被害調査をするため越冬して試験・観測をする試験所が、雪氷試験に最適であった枝折峠にあった。着氷と電流の関係など調査されたい。調査員はいずれも東京出身で、枝折峠の冬の悪天候の中、命がけの測定を続けたそうだ。このように住み慣れた土地から移転してくれた人達や、ダム建設や調査・研究を命をかけて行った人達のおかげで東京は沢山電気を消費する事が可能になったのだ。(写真⑧)



にいがた MALUI 連携地域データベース

現在、教育・研究に関わるMARUI（博物館・文書館・図書館・大学・産業界）では、書籍・絵画・古文書・動画・写真・音源などのデジタル化を行い、文化資源化することが課題となっています。これらの文化資源活用の効率性・利便性を高め可能性を広げていくために、広く県内全体の文化資源を一元的に管理公開するシステム（MALUI連携による統合型データベース）を構築することが、緊急の問題となっています。しかしながら、この試みは膨大なデータ量を処理する必要があるだけでなく、さまざまな機関が参加する必要があります。また新たなシステムを築く必要があります。

今回、MALUI連携に向けて、新潟大学人文社会・教育科学系附置地域映像アーカイブ研究センターの新潟大学「にいがた 地域映像アーカイブ・データベース」（写真・動画・音源など約4万点）と、新潟県立図書館「郷土新聞画像データベース」（戦前の郷土新聞発行別で約3万件（約20万紙面））とを統合して、公開・閲覧することができるようになりました。研究や教育はもとより、地域の文化資源をまちづくりなどに生かすなど、現代的な観点からも活用できることになるでしょう。



<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/malui/>

今後、研究・教育機関のみならず新聞社や放送局などにも呼びかけを行い、オール新潟のMALUI連携へと発展させていくことが望まれています。

にいがた MALUI 連携地域データベース
<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/malui/>

2017年3月より、この統合型データベースは閲覧することができますが、新潟大学「にいがた 地域映像アーカイブ・データベース」の閲覧と、新潟県立図書館「郷土新聞画像データベース」の高解像度版とそれによる新聞のプリントは、新潟県立図書館と新潟大学、ならびに連携している大学、図書館、博物館などの機関でしか閲覧できません。

なお、研究用の個人用申請制度があります。詳細は、上記「にいがた MALUI 連携地域データベース」の「ご利用方法」をご覧ください。

地域映像アーカイブ研究センター長
 原田健一

連携の問い合わせ先

新潟大学・人文社会・教育科学系附置 地域映像アーカイブ研究センター
cria@human.niigata-u.ac.jp



「郷土新聞画像データベース」



「にいがた地域映像アーカイブデータベース」

デジタルアーカイブ叢書2

「地域と映像アーカイブ—記憶とデジタル化をめぐる実践と研究」（仮題）

| | | | |
|------|---------------|---|------------------|
| 第1章 | 水島久光 | ソーシャル・デザインとしてのデジタル・アーカイブ | 原田健一・水島久光編 |
| 第2章 | 前川道博 | 地域の知の再編「地域デジタルコモンズ」の実現に向けて | 学文社 2018年2月末刊行予定 |
| 第3章 | 原田健一 | 「可能現実存在」としてのデジタル・アーカイブの作法 | |
| 第4章 | 水島久光 | ゆうばりアーカイブがつなくもの —地域映像アーカイブの構築と活用に関する課題— | |
| 第5章 | 浅岡隆裕 | 地域社会における近い過去の歴史表象の意味 | |
| 第6章 | 板倉史明 | 地域ネットワークの集積拠点（ハブ）を構築する —アーカイブと大学の連携活動から— | |
| 第7章 | 石田佐恵子 | エフェメラメディアを凝視する —万年社アーカイブ・CMデータベースの事例から— | |
| 第8章 | キム・ジュニアン、石田美紀 | 教育と研究におけるアニメ中間素材のアーカイブ化 | |
| 第9章 | 榎本千賀子 | 「村の肖像」制作の現場から： 福島県大沼郡金山町における映像アーカイブ構築 | |
| 第10章 | 原田健一 | 「コミュニティ」の映像 —地域・メディア・研究をつなぎ直す— | |

他、全20章

報告書

報告書『光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ』



南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク
 2016年3月刊 非売品

平成26年（2014）に締結された南魚沼市と新潟大学文学部との連携協定のもと、南魚沼市、新潟大学文学部、池田記念美術館の三者によって構成された「南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク」を主催者として、魚沼映像アーカイブによる記録と記憶の再生プロジェクト「光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ」を開催しました。その報告書となる本書では、展覧会・講演会・シンポジウム・歴史文化教育事業からなるプロジェクトの全体像を振り返るとともに、南魚沼市に残る幕末から昭和期までの様々な映像を、新潟の日本舞踊の流派・市山流所蔵の写真とあわせて、一冊の写真集として再構成しました。地域映像の豊かな世界と、地域映像アーカイブの最新の活動を、日英両表記で地域内外に広くご紹介します。

新潟大学・環東アジア地域課題解決へのネットワーク拠点形成
 新潟大学・環東アジア地域教育研究拠点形成
 新潟大学人文学部・福島県大沼郡金山町連携協定記念

にいがた 地域映像アーカイブ 第7号

2017年11月15日 発行
 ISSN-1883-5643

表紙・裏表紙写真 角田勝之助

表紙：TK-P-017-020-02
 金山町・玉梨 船城和雄宅建前 1979年6月

裏表紙：TK-P-011-076-14
 金山町・玉梨 庭 1971年11月

企画 新潟大学人文社会・教育科学系附置
 地域映像アーカイブ研究センター

編集 原田健一（新潟大学）

発行 新潟大学

問い合わせ先 〒950-2181
 新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050番地
 新潟大学文学部内
 地域映像アーカイブ研究センター

E-mail cria@human.niigata-u.ac.jp
 URL <http://www.human.niigata-u.ac.jp/ciap/>

デザイン パルスデザイン